

総務厚生常任委員会は平成22年11月8日から11月10日の3日間、縁組協定を行っている群馬県川場村と東京都世田谷区へ研修に行きました。群馬県でもひとときわ輝いているこの村は、水面下でどのような努力をしているのか、現地へ一泊して調査を行いました。

### 川場村の調査項目

**住民にどのようにして交流を浸透させたか。(もともと商才を持ち合わせていたのか、行政等の啓発により、区民の受け入れ態勢が整備されたのか)**

住民は当時流行していたゲートボールで交流し、子供たちは民泊で行き来した。農作物の販売は年200回くらい世田谷へ持ち込み販売した。5年くらいは山村留学も行った。これにより40人~45人学級を維持できた。お互いに不足するものを補い、関係は深くなった。

**二十数億円の財政の中で、住民のニーズのうち、どの部分に力点を置いているか。**

「子育てをするなら川場村」をキャッチフレーズに子育て支援に力を入れている。

- 小中学校の入学祝金制度…5万円
- 第1子誕生祝金 …………… 10万円
- 第2子誕生祝金 …………… 20万円
- 第3子誕生祝金 …………… 30万円
- 中学校卒業までの子供の医療費の無料化

**簡素な組織機構と少ない職員により、効率的な行政サービスを行うために、どのような工夫をしているか。**

効率は職員を減らすだけでは出来ない。減らせばよいというものではない。一人当たりのカバー率を上げるしかない。困難ではあるが、士気を高めるために努力している。

県の研修でモチベーションを高める。結果は庁内で共有する。庁内研修、課内研修を行う。

人事異動は若い人で3年、課長クラスは5年くらいだ。

研修として職員にスーパーの売り子に行かせる。83万人の来客がある村なので職員も接客をする。

**昨年の訪問時には、住民の皆さんは豊かであると感じたが、何か施策を講じているか。**

道の駅 田園プラザは10年目になる。6年かけて用地を取得し、ファーマーズマーケットは年3億円を売り上げる。組織は300人、最高額でひとり450万円を売る。

リタイアした老人が2反くらいの畑で野菜を作り売上を上げる。マージンは15%、生きがいにつな

がっている。健康で元気な老人は群馬県で一番だ。国保料も一番安い。

- 縁組関係にある世田谷区を重視して、近隣の合併を行なわなかった。
- 職員は住民がこの村で生活していて良かったと感じてくれることが生きがいだ。
- 直売所が老人の生きがいになっている。
- 東京農大生に山仕事を体験させた、区民が加わって交友の森作りに発展した。
- 田園プラザは7億6,400万円を売り5年連続全国トップだ。植樹祭や献穀祭で皇族を川場へお迎えすることで、集客を図っている。

少ない職員で業務をこなすのはかなりきつい状況だ、フォローをし合い、課長が動くようにしている。イベント村なのでいつも職員は動員される。

●米は年8回の勉強会を行い6回以上の出席がない場合は買い取らない。はじめは食味は70点代で、群馬の米は猫またぎと言われていた。群馬は麦の産地だ。田んぼ1枚ずつ土壌検査を行い、多収をやめることを進めた。食味により3段階に分類している。武尊山(ほたかさん)は蛇紋岩の山でヤマトタケルが熊襲征伐に行くとき、この地の米を食べて力をつけて戦いに挑むという物語を作った。食味がいい原因は蛇紋岩だ。水は生活利水の入らない上流から用水を引いている。土地の美味しい水が美味しい米を作る。美味しいものは高く買ってもらえる。高い程よく売れた。



川場村役場会議室にて

生産から加工販売まで、ほぼ全村民がかかわっているヒメノモチの村、岡山県新庄村を平成22年11月5日視察しました。

### ヒメノモチに1点突破で臨んだ新庄村

新庄村は明治以来一度も合併せずに現在に至っていますが、人口は約1,000人、面積は飯南町の約4分の1という小さな村です。農業改革あるいは6次産業化が叫ばれるなか、ヒメノモチにしばり一点突破で6次産業化を確立されつつあります。

昭和55年冷夏に見舞われた際、村内で試験的に栽培されていたヒメノモチは、うるち米に比べ収穫が落ちなかったことから、官民一体となって村の進むべき道を確立し、ヒメノモチの村へと進まれました(最初のヒメノモチの種子は旧頓原町から譲り受けたそうです)。

平成3年、第三セクター(株)メルヘン・プラザを設立し、販売拠点を確立。平成14年、ヒメノモチ加工場を完成させ大量生産が可能になり、同年ヒメノモチ生産組合を設立し、農協による一元集荷がスタートしました。



正月用のまるもち

岡山市では現在「正月は新庄の餅で」という空気が広がっているようですが、これも一朝一夕にできたものではありませんでした。村職員も加わって「お祝い餅つき隊」を結成し岡山市内や近県で餅をついたり、また、お金のかかる宣伝広告はせずに情報発信を重視するなど、官民一体による取り組み成果の確かさを感じました。

私どもの視察に対応していただいた新庄村職員の、「わが村を最大限売りこもう」とする姿に感謝と敬意を表します。



出荷直前の商品



道の駅「メルヘンの里新庄」

村はヒメノモチ栽培促進のために、農協の買い取り価格1俵(60Kg)に1,000円上乗せして1万6,000円とし、うるち米からの転作を促しています。

財政状況は、飯南町に比べれば極めて健全なもの、厳しい印象も受けましたが、村が助成してまでヒメノモチにこだわるのは、平成大合併に加わらず、自主自立を目指す村の生命線であるとの強い意志の現れだと感じました。

道の駅には餅米を加工した新庄村オリジナル商品が並んでいました。2008年度、村内で加工したもちの売上額は6,245万円を記録、57万円だった2002年度から6年間で100倍以上に伸びたこととなります。